

住教育セミナー in 江別

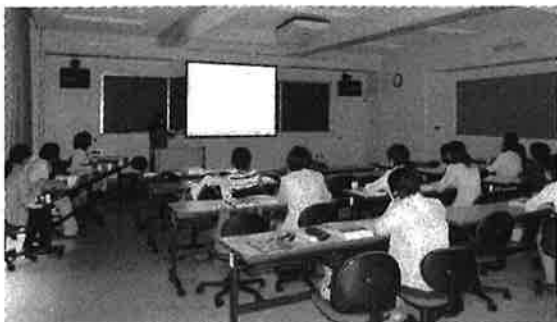
道南B（苫小牧支部） 北村 裕子

平成21年7月29日、全道の高等学校の家庭科の先生達による教育研究協議会が、北海道江別高等学校を会場に開催されました。

昨年に続きその協議会の1つの分科会で、女性委員会から7名が出席して、「くらしの主角を育てる住教育」をテーマに住教育セミナーを行いました。当日は11名の家庭科の先生が参加され和やかなセミナーとなりました。

近年、高等学校の家庭科の授業は1週間に2時間しかない学校が多く、住生活分野の取り組みが十分できていない傾向にあると先生から伺い、住教育セミナーでは、住生活分野を食生活分野に組み込んで考えてみることにしました。

研修会は、工藤美智子さんによるセミナーと建築士と共に考える実習を行い、最後に早川委員長が授業への応用について話されました。



セミナー「食と住まい」の様子

■ セミナー「食と住まい」

工藤さんからは、食事を作る・食べる・片付けるという一連の作業から、自分にとってのより良い住まいの考え方の実例を紹介しながら、わかりやすくお話していただきました。キッチン周りの寸法、配列・調理と収納・照明のあり方など映像を使った説明でしたので、聞きながら、改めて自分の理想のキッチンを思い描くことができました。

■ 実習「自分らしい住まい」では

4テーブルに分かれ、各テーブルに女性建築士1名がテーブルマスターとしてつき、各自に例として約90㎡のマンションを自分らしい住まいにプランニングしてもらいました。さすがに先生達はテーマを考え、どんどんペンを走らせてくれました。

途中私達からのアドバイスを受けながら、これからの親の介護や老後の生活を考えたプラン、自分の好きな和風のインテリアにしたプランなど豊かな発想でいろいろな住まいが出来上がりました。

この研修会を通して住生活の分野が授業へも積極的に取り上げられ「住まい」を考えることの関心と重要性が学生の皆さんにも広がる様になる事を期待いたします。



実習「自分らしい住まい」の様子

平成21年度 女性建築士の集い

♪・・・おたる・歴建・さんぽ・・・♪

道央A（小樽支部） 銭亀三佐子

第34回全道大会「小樽・後志大会」が開催された翌日の10月4日、小樽に現存する明治から昭和初期の住宅の見学会が行われました。

見学した建物は、昭和2年に建てられた坂牛邸（田上義也・設計）と明治37年以前に建てられた旧金澤友次郎邸・洋館・五楽園（現・駒木邸）です。

講師は、小樽の歴史的建物の生き字引的存在であり駒木定正氏（北海道職業能力大学校建築学科助教授）です。当時の暮らしぶりや時代背景等を交えた、先生の定評のあるご説明を頂きました。

最初に見学した坂牛邸は、当時弁護士事務所として田上義也により設計されました。彼はF・L・ライトが帝国ホテルを建設時に設計に参加し、その後北海道にてフリーの建築家の草分けとなりました。坂牛邸は小樽公園に隣接し、白い壁と緑の屋根が美しい外観を持ち、「緑の館」と呼ばれていたそうです。外部、内部ともに水平線と垂直線が織りなす幾何学的な力強さを感じる階段部分、広く張り出した多角形の応接間や、それらにあわせて制作されたテーブルや椅子、天井の飾りなど随所に田上義也らしいデザインが盛り込まれていました。



坂牛邸の内部 多角形の応接間

現在はNPO小樽ワークスによって今後の活用と保存の為に活動が展開されております。



小樽公園の白樺林より見た坂牛邸

次に見学した駒木邸は本日の講師駒木先生のご自宅です。特別にこの度の見学会に際し公開して下さることになり本当に有難うございました。

駒木邸は明治37年以前に、旧金澤友次郎邸（五楽園）として建てられ、当時は正面に和館、右手側に洋館、左手側に煉瓦蔵座敷、奥に石蔵を備えた邸宅でした。そのうちの洋館部分を昭和62年に現在の天狗山の麓に近い最上に移築され、移築時に中央の居室部分と和室を増築したそうです。移築後、自然に溶け込んだ薄いグリーン色の瀟洒な破風飾りや軒飾り、屋根鬼瓦が載った外観が素晴らしく、小樽市都市景観賞を受賞しました。内部は高い天井の応接間があり大理石の暖炉、タイル、窓飾りなど当時の部材を大切に再生されて重厚な雰囲気漂っておりました。



駒木邸前 駒木先生を囲んで

見学会の締め括りとして、駒木邸移築と同時期、旧金澤邸の和館部分の床の間や部材を再利用して造作した「そば処藪半」にて、薫り高い新蕎麦ランチをみんなで美味しく頂き満足な小樽の一日でした。

全国大会～山形への旅

道央A（札幌支部） 山本 明恵

全国大会への参加は私にとって、日常を忘れさせるための休息と、訪れる土地にふれる新たな発見と連合会女性委員会で交流のあった友達との再会を喜び合う機会です。10月15日のお昼に山形入りした私を迎えたものは、雄大な自然とこの季節にしては汗ばむくらいの暖かな陽気で、すっかり観光気分になっていました。山形駅から程近い霞城公園内の山形県立博物館で山形の自然・歴史・民俗を学び、のんびりと街中歩きをすることに。高層ビルもなく落ち着いた風情のある山形市はどこことなく懐かしさを感じる街です。さっそく山形名物の蕎麦と地酒を味わいました。

大会当日（16日）はシャトルバスを利用して会場（山形市総合スポーツセンター）へ、交流プラザでは建具組合が展示していた木製建具のすばらしさと伝統の技に感動し、屋台出展コーナーの「まち・もの・くらしづくり」をテーマとした士会活動に刺激を受けました。地域密着型の活動は、開かれた、より分かり易い建築士の役割と、地域住民と共に育む継続性のあり方に気づかされるものばかりでした。

次の日、エクスカーションBコース（教養コース）「羽州街道・榎下宿と芭蕉の山寺探訪」に参加しました。楽しい山形弁のガイドを聞きながら、参勤交代で栄えた榎下宿や歌人斎藤茂吉記念館を探訪し、山寺へ。美しい山並みに抱かれた「山寺芭蕉記念館」は京都北山杉を用いた本格的な数寄屋造りです。見学は芭蕉展示室のみでしたので少し残念でした。宝珠山立石寺、通称山寺は霊場として広く信仰されたところで、芭蕉が詠んだ句「閑かさや岩にしみ入る蝉の声」で有名です。山門から一番上の五大堂までは1015段の石段を登らなければならず、体力の無い私は230段くらい登ったところにある、芭蕉の名句の「蟬塚」で残念ながらリタイアでしたが杉の木の香りを感じ、途中の石仏を拝観しながら一段一段登った後は気分爽快でした。山形市内に戻り文翔館（旧県庁舎と県会議事堂）を見学、イギリス・ルネサンス様式を基調とした重厚さと、漆喰飾天井の貴賓ある美しさは感動です。三日間の山形の旅は自然・歴史・文化そして郷土の味を満喫する楽しい旅でした。「山形はいがったな～」



交流プラザ



山 寺



文 翔 館